〇21 番（川上陽平）登壇　私は自由民主党福岡市議団を代表して、福岡市が取り組んでいる認知症コミュニケーション・ケア技法、ユマニチュードについて質問をいたします。

福岡市は若者を中心に多くの人々が集い、全国的にも活力にあふれる都市として広く知られております。都市としての魅力と利便性に加え、豊かな自然や文化が調和する福岡市は国内外から高い評価を受けております。日本全体が既に人口減少社会へ突入している中にあって、福岡市は人口の増加が続いており、2040 年には 170 万人に達すると予測が示されています。しかしながら、その人口構成に目を向けますと、増加の大半を占めるのは高齢者であり、今後、急速に高齢化が進展すると見込まれております。高齢化の進行に伴い、地域社会において様々な課題が顕在化していくことが予想されますが、その中でも特に重要な課題の一つが認知症の増加です。認知症とは、後発的に何らかの原因により脳の機能が低下し、それに伴って記憶、判断、理解などの認知機能に障がいが生じ、日常生活に支障を来す状態を指します。また、加齢が最大のリスク要因であり、誰もがなり得るものです。こうした状況を踏まえ、福岡市では平成 30 年度より世界の自治体として初めて認知症コミュニケーション・ケア技法、ユマニチュードを本格的に導入し、国内外から大きな注目を集めております。私の下にも、介護の現場で日々尽力されている職員さんからも、ユマニチュードは有意義な取組であり、現場に積極的に取り入れていきたいとの声が寄せられております。

そこで、福岡市がユマニチュードを導入するに至った経緯、現在進めている主な施策の内容、そして、今後の普及促進に向けた取組の方向性についてお尋ねしてまいります。

まず、福岡市にはどのくらい認知症の人がいるのか、そして、今後どのくらい増えていくのか、認知症の高齢者人口とその将来推計についてお尋ねいたします。

以上で１問目を終わり、２問目以降は自席にて行います。

〇21 番（川上陽平）　福岡市は若くて元気な都市というイメージがありますが、福岡市全体の人口増加をはるかに上回るペースで認知症の人が増えていくことが分かりました。そうした中、福岡市は平成 30 年２月に認知症フレンドリーシティ・プロジェクトを立ち上げました。

この認知症フレンドリーシティ・プロジェクトを立ち上げた経緯についてお尋ねをいたします。

〇21 番（川上陽平）　次に、この認知症フレンドリーシティ・プロジェクトではどのような事業に取り組んでいるのか、お尋ねをいたします。

〇21 番（川上陽平）　福岡市は令和５年９月にあいれふの２階に認知症フレンドリーセンターを開設しました。私も現地を訪問した経験がありますが、このセンターは、先ほど局長からの答弁にありました認知症の人にも優しいデザインをふんだんに取り入れてつくられたそうです。この認知症の人にも優しいデザインとは、認知症により記憶障がいや理解力、判断力などが低下する認知症の症状に対応するため、壁面や床材の色彩に明確なコントラストを持たせるほか、文字情報とピクトグラムを併用するなど、視認性と理解のしやすさを高め、記憶に頼らず行動できる工夫が凝らされております。このようなデザインを取り入れることで、認知症の方のみならず、全ての来訪者にとって快適で安心できる空間になるように配慮されております。さらに、この認知症の人にも優しいデザインについては、デザインの策定、導入だけでなく、事例を写真入りで詳細に公表している点などが高く評価され、公益財団法人日本デザイン振興会から 2024 グッドデザイン・ベスト 100 にも選出されたと聞いております。

こうした認知症の人にも優しいデザインは、現在、市内の様々な施設でも導入が進められており、例えば、多くの福岡市民が日常的に利用する地下鉄のトイレの案内表示にも利用されているほか、民間施設にも広がりつつ

あります。このような取組が福岡市全体に広がっていることは、認知症の人がストレスなく安心して暮らせる環境整備に資するものです。この認知症の人にも優しいデザインがハード面での認知症の人への支援ですが、ソフト面で福岡市が取り組んでいるのがユマニチュードです。今日は認知症フレンドリーシティ・プロジェクトのもう一つの柱であるユマニチュードについて詳しく質問してまいります。

多くの方は既に御存じかもしれませんが、ここで改めてユマニチュードとは何かを教えてください。

○21 番（川上陽平）　ユマニチュードとは、認知症の人に優しさを伝えることができるコミュニケーション・ケア技法だということです。ジネスト氏らによってケアの現場での試行錯誤の中から生まれたユマニチュードには、人間らしさを取り戻すという意味があります。単なるケアの技術ではなく、人間とは何か、ケアする人とは何者かという哲学に基づき、認知症の人との関係性を重視したケアだということです。福岡市はいち早くこのユマニチュードに着目し、平成 30 年度から世界で初めて自治体として導入したわけですが、導入に当たり、福岡市は医療、福祉、介護施設と実際に認知症の御家族を介護しておられる皆さんに御協力をいただき、平成 28 年から平成 29 年の２か年にわたって実証実験を行ったと聞いております。認知症の人の介護の現場では、ケアを拒否する、暴言を吐くといった症状を行動心理症状と言いますが、これが介護する人にとって大きな負担になっています。

ユマニチュードの講座を受講された介護者の皆さんが実際にケアの現場で活用された結果、認知症の人の行動心理症状や介護者の負担感等にどのような変化があったのか、お伺いいたします。

○21 番（川上陽平）　ユマニチュードを実践すると、認知症の人とのコミュニケーションが改善されるようですが、実際にそのような事例が確認されたのでしょうか。

実証実験に参加した職員からは具体的にどのような声が寄せられたのかをお尋ねいたします。

○21 番（川上陽平）　実証実験において、データの数値が変化しただけではなく、受講者からの聞き取りなどでもユマニチュードの効果について意見が寄せられたということです。実証実験によってしっかりと効果を確認した上で、福岡市はユマニチュードを本格的に導入したことが分かります。

それでは、ユマニチュードを導入した平成 30 年度以降、福岡市はどのような形で普及に取り組んでおられるのか、お尋ねをいたします。

○21 番（川上陽平）　専門職や家族介護者だけでなく、幅広く市民の皆様に普及を進めていることが分かりました。

そこで、地域の皆さんや子どもたちに知ってもらうための講座についてお尋ねいたします。

令和６年度に公民館と小学校で講座を実施したと聞いていますが、その実施状況と令和７年度の展開についてお尋ねいたします。

○21 番（川上陽平）　令和６年度から全ての小学校で実施し、７年度からは全ての中学校でも実施しているとのことです。各学校の理解がなくては実施できないことだと思います。

中学校では主に１年生のときに受講するとのことですが、その理由をお尋ねいたします。

○21 番（川上陽平）　介護、福祉の分野に興味を持ってもらういい機会になると思います。中学生は思春期に差しかかり、社会的な視野が広がる時期であり、認知症に対する理解と共感を育む教育は、将来の地域づくりにおいても大きな意味を持つのではないでしょうか。

それでは、学校で講座を受講した児童生徒の皆さんの反応はどのようなものなのか、お尋ねをいたします。

○21 番（川上陽平）　心温まるエピソードを伺い、早い段階から知っておくことの重要性を感じます。小学校や中学校でユマニチュードを学ぶことは、認知症の人のみならず、友達をはじめ、他者に対する思いやりの心を育み、コミュニケーション能力の向上にもつながると期待しております。

では、保護者からどのような声が寄せられているのか、お尋ねをいたします。

○21 番（川上陽平）　保護者からも肯定的な意見が寄せられているとのことでした。お子さんと話をすることで認知症への理解も進み、ユマニチュードを知る機会の増加にもつながっているのではないかと思いますが、市民の皆さんに広くユマニチュードを知っていただくためには、効果的な広報活動、啓発活動の展開も必要です。

そこで、令和６年度に福岡市が実施したプロモーション活動の具体的な内容についてお尋ねをいたします。

○21 番（川上陽平）　ユマニチュードが市民の間にどの程度浸透しているのかを把握することは、今後の施策展開において重要な指針となるものです。

そこで、福岡市が実施した市政アンケートにおけるユマニチュードの認知度、すなわち言葉も内容も知っている及び言葉は知っているが内容は知らないと回答した市民の割合の合計値について、過去３年間の推移をお尋ねいたします。

○21 番（川上陽平）　今、局長から答弁がありましたとおり、令和５年度まで約２割で推移していた認知度は令和６年度は４割へと倍増したということです。この大幅な増加は、福岡市が継続的に取り組んできた講座や広報活動の積み重ねによる成果であり、今後もさらなる普及促進が期待されます。

なお、認知度４割の中には、ユマニチュードという言葉は認識しているものの、その具体的な内容までは把握していない市民も含まれています。しかしながら、ユマニチュードという言葉が広く知られることにより、例えば、御家族が認知症になった際に、福岡市が認知症の関係でユマニチュードを推進しているという事実を思い出していただければ、福岡市のホームページを通じて情報を収集し、ユマニチュードを学ぶ講座にアクセスしていただくきっかけとなる可能性があるのではないでしょうか。このような観点からも、ユマニチュードという言葉を知っていると回答された市民が大幅に増加したことは意義深い成果であると考えます。今後もユマニチュードの講座を開催するなどして、多くの市民にユマニチュードを知ってもらい、学んでもらうための機会を設けるよう要望いたします。

次に、令和６年度に福岡市において第６回日本ユマニチュード学会総会が開催されました。

本総会は自治体として世界で初めてユマニチュードの導入に取り組んだ福岡市がその成果と展望を広く発信する場として注目を集めましたが、この総会はどういったものなのか、お尋ねをいたします。

○21 番（川上陽平）　では、総会を開催してどのような効果があったのか、お尋ねいたします。

○21 番（川上陽平）　本総会はメディアでも報道され、公民館などで講師をしている地域リーダーの方が総会で発表された様子が新聞で取り上げられていました。この地域リーダーとは、福岡市がユマニチュードの普及促進を目的として独自に育成した講師のことであり、通常はユマニチュード学会の認定インストラクターが講座を担当するところですが、公民館や小中学校での講座など、地域での講座開催のニーズに応えるため、福岡市と日本ユマニチュード学会が連携して地域リーダーの育成に取り組まれたそうです。報道によると、本総会では、地域リーダーが講師として活動する中、講座を受講した子どもたちや地域の方、子どもたちの保護者、そして、御近所の方にユマニチュードの有効性が伝わり、地域に浸透していく実感が語られたそうです。このように、本総会は単なる学術的な集まりにとどまらず、認知症に優しい社会の実現に向けた市民参加型の取組と融合した意義深

いものであったと言えます。

また、福岡市が先導する地域リーダーの育成をはじめとするユマニチュードの普及活動は、今後の認知症施策のモデルケースとして、全国の自治体にとっても大いに参考になるものであったと考えられますが、総会の開催後、どのような反響があったのか、お尋ねをいたします。

〇21 番（川上陽平）　市民の認知度も令和５年度の 19%から令和６年度には 40.5%へと大きく増加しておりますが、総会の開催を契機として、ユマニチュードの取組は全国に広がりを見せ始めており、福岡市は自治体として世界で初めて本格導入に踏み切った先進的な事例として、その影響は広く波及しているようです。また、福岡市が積み重ねてこられた知見や実践事例は、認知症施策に取り組む全国の自治体にとって極めて有益なものです。福岡市がユマニチュード普及のモデル都市として積極的に情報発信を行っていただき、全国的な理解と実践の広がりに貢献されることを期待しております。

次に、今後のユマニチュードの施策展開についてお尋ねしてまいります。

先ほど福岡市でユマニチュード学会の総会が開催された後、多くの自治体から視察や問合せが寄せられたと局長答弁がありましたが、海外からも視察があっていると聞いております。

ユマニチュードや認知症施策に関する福岡市の取組について、令和６年度の海外からの視察件数についてお尋ねをいたします。

〇21 番（川上陽平）　福岡市の先進的な取組は、海外からも高い関心を集めているようです。ユマニチュード発祥のフランスでは、医療、介護現場におけるケアの方法を中心に、世界各国の専門家が集まる学会が継続的に開催されており、深い議論が交わされているそうです。そして、令和５年 11 月にパリの近くのモンルージュという場所で開催された第 16 回非薬物的アプローチ学会には高島市長並びに荒瀬副市長が出席され、ユマニチュード普及に取り組む、福岡市を含む８つの団体が国境を越えてユマニチュードの普及に協力することを宣言し、国境なきユマニチュード憲章に調印したと聞いております。

そこで、国境なきユマニチュード憲章に調印した唯一の自治体として、福岡市は今後どのような方針の下、ユマニチュードの理念を広げていこうとされているのか、御所見をお伺いいたします。

〇21 番（川上陽平）　これまで福岡市におけるユマニチュード導入の経緯から、市民向けの講座の開催、ユマニチュード学会の総会、そして、今後の施策展開についてお尋ねしてきました。福岡市は第 10 次基本計画において、アジアのモデル都市として世界とつながり、国際的な存在感がある都市を目指すとの理念を掲げております。

この理念の下、福祉分野においても福岡市がアジアのリーダー都市として責任と役割を果たすことが求められていると考えますが、最後に、今後、福岡市が福祉分野を含め、アジアのリーダー都市としてどのように取り組もうとされているのか、高島市長の御所見をお伺いし、私の質問を終わります。